第２章　野宿生活者の生活実態

Ⅰ 野宿生活者に対する聞き取り調査地点

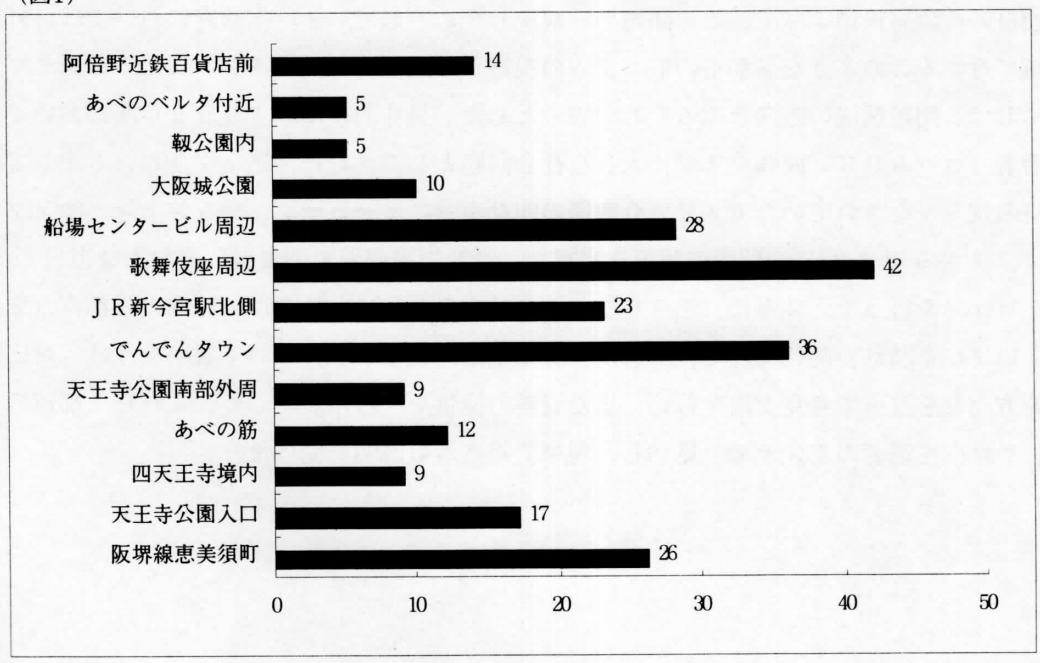
今回の調査では、まず事前に、調査区４区内のどのあたりに野宿生活者が多いかを視察によって確認し、１２の調査地点を決定した（調査地点については表１を参照）。そして実際の聞き取り調査は、この１２地点を中心に行われた。聞き取りの時間帯は大体夕方の６時くらいから夜の１０時ころまでで（深夜調査も２回行った）、彼等が実際に野宿している場所で聞き取りを行った（移動中とおもわれる野宿生活者に対しては原則として声をかけなかった）。それゆえ、今回の調査で聞き取りを行った２３６人の野宿生活者の空間的広がりと密度は、当該４区における実際のそれをかなり忠実に写像していると考えられる。

（表１）

場所	人数	
阪堺軌道恵美須町駅周辺	26	11.0%
天王寺公園入口付近	17	7.2%
四天王寺境内	9	3.8%
あべの筋	12	5.1%
天王寺公園南部外周～地下鉄動物園前	9	3.8%
日本橋でんでんタウン	36	15.3%
ＪＲ新今宮駅北側から南海本線ガード下・阪神高速恵美須町ランプ付近	23	9.7%
南海電鉄なんば駅から歌舞伎座周辺心斎橋アーケードから	42	17.8%
船場センタービル周辺	28	11.9%
大阪城公園	10	4.2%
靱公園内	5	2.1%
あべのベルタ付近	5	2.1%
阿倍野近鉄百貨店前・近鉄阿倍野駅地下道	14	5.9%
合計	23	100.0

次の（表1）と（図1）は、調査地点別の被調査者の人数を示したものである。ここからわかるように、４区において最も野宿生活者が多いのは「阪堺電車恵美須町駅」から「日本橋でんでんタウン」を経て「南海なんば駅」へと至るライン上である。そして、このラインは南へ下ってまっすぐに「あいりん（釜ヶ崎）」地区とつながっている。後に触れるように、この大阪市中南部４区における野宿生活者の存在は、日本最大の簡宿街（ドヤ街）であり、単身日雇労働者の密集居住地区でもあ

（図1）

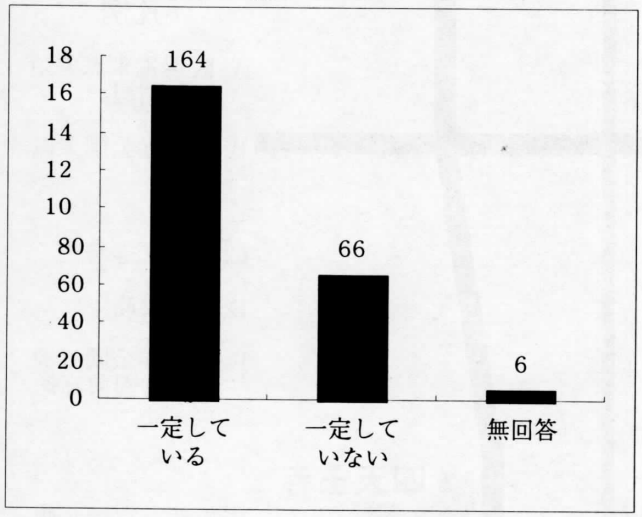


る釜ヶ崎の現実と密接不可分に結び付いているのであり、このことが今回の調査の対象となった野宿生活者の空間的広がりのうちにもはっきりと示されていると言えるだろう。

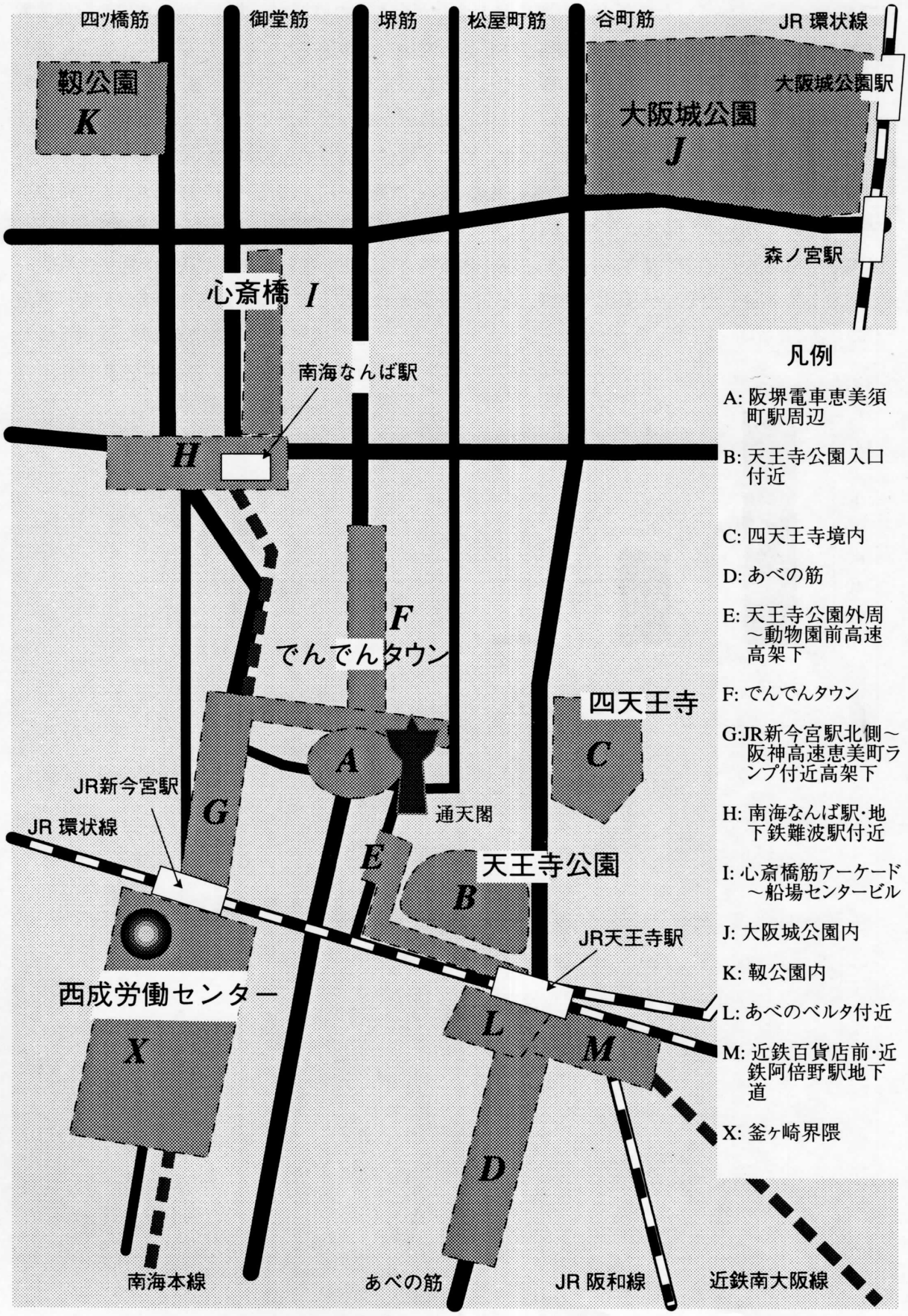
ところで、事前の視察では、中央区の「大阪城公園」もまた多数の野宿生活者が居住している地点であると確認されていたのだが、実際に聞き取りが行われた時期が、ちょうどAPECの開催準備期と重なり、大部分の野宿生活者が他地区へ移動していた（排除されていた）ために、実際に話を聞くことができた人数はかなり少なくなってしまった（１０人）。この地域の野宿生活者の生活形態は南部のそれとは大きく異なっており（具体的には、かなり大がかりなテントを設営し、家財道具をそろえ、犬猫等のペットを飼うなど、きわめて「定住生活」的色彩が強い）、またそこで生活している人たちの社会的背景も他地区の人たちのそれとは異なっているだろうと予想されたのだが、上述の事情により、聞き取りができた人数は少数にとどまってしまった。この点はご了解ください。

次に、２３６人の野宿生活者に対して普段「寝る場所は一定しているか」どうかを聞いた質問に対する回答を集計したものが（図2）である。「寝る場所は一定している」野宿生活者はいわば「定着」度が高いと考えられるが、このような定着度の高い野宿生活者が全体の約70％を占めている。

（図2）寝る場所は一定しているか



1995年大阪市中南部野宿生活者聞き取り調査
調査地点



Ⅱ 野宿生活者の基本的な属性

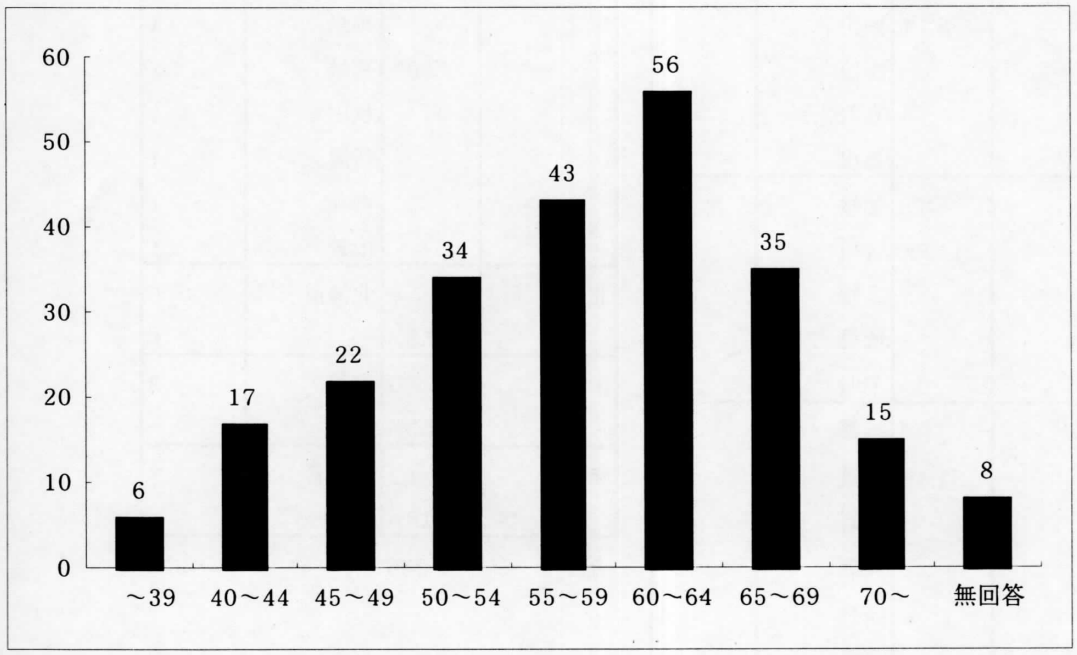
1．性別・年齢構成と結婚歴

次の（表1）と（図1）は、今回の聞き取り調査の対象者２３６人の野宿生活者の年齢分布を示したものである。ここに示されているように、野宿生活者の年齢構成は、大きく高年齢に片寄っている。４０歳未満はわずかに６人（2.5%）で、６０歳以上が50%近くを占めている。ちなみに平均年齢は、57.3歳である。また、性別構成について言えば、女性の野宿生活者はわずかに５名である。すなわち、野宿生活者の大部分は男性、しかも高齢の男性である。さらに、このように高齢者が多数を占める野宿生活者であるが、彼等の大多数は同時に「単身者」でもある（表2、3を参照）。２３６人中２３2人が一人で野宿生活を送っており、わずかに４人が配偶者と暮らしているだけである。このように、野宿生活者の属性において最も顕著な特徴は、彼等の大多数が男性の単身高齢者であるということである。

（表１）

年齢区分	人数	比率
～39	6	2.5%
40～44	17	7.2%
45～49	22	9.3%
50～54	34	14.4%
55～59	43	18.2%
60～64	56	23.7%
65～69	35	14.8%
70～	15	6.4%
無回答	8	3.4%
合計	236	100.0%

（図１）年齢構成グラフ



（表2）　結婚歴

結婚歴	人数	比率
あり	87	36.9%
なし	115	48.7%
無回答	34	14.4%
合計	236	100.0%

（表3）　「結婚歴あり」の人のみについて

内訳	人数	比率
同居	4	4.6%
死別	17	19.5%
離別	15	17.2%
離婚	51	58.6%
合計	87	100.0%

2．野宿生活者の出身地

次の表は２３６人の野宿生活者の出身都道府県を集計したものである。都道府県別では、大阪府の出身者が最も多く（３６人）、ついで兵庫、福岡。愛媛、長崎、東京、鹿児島となっている。地方別に見ると近畿地方が最も多く７４人で全体の31.4％を占めている。次に多いのは九州地方で６６人（28％）、続いて四国地方の２８人（11.9％）となっている。

出身地	人数	都道府県	人数
九州・沖縄	66	沖縄	3
	28.0%	宮崎	6
		佐賀	5
		鹿児島	11
		長崎	12
		大分	7
		福岡	14
		熊本	4
		不明	4
中国	19	広島	4
	8.1%	岡山	7
		山口	2
		鳥取	3
		島根	3
四国	28	愛媛	12
	11.9%	香川	7
		高知	4
		徳島	4
		不明	1
近畿	74	京都	5
	31.4%	三重	4
		滋賀	2
		大阪	36
		奈良	4
		兵庫	20
		和歌山	3

出身地	人数	都道府県	人数
中部	9	富山	1
	3.8%	福井	3
		石川	3
		愛知	2
関東	22	東京	12
	9.3%	千葉	1
		静岡	1
		神奈川	3
		茨城	2
		埼玉	3
東北	7	福島	1
	3.0%	宮城	2
		秋田	1
		新潟	1
		青森	1
		山形	1
北海道	6	北海道	6
	2.5%		
国外	3	国外	3
	1.3%		
無回答	2	無回答	2
	0.8%		
合計	236		236

Ⅲ 野宿生活者の実態

1．「野宿生活」の規定要因

「野宿生活」とは、ただ単に「外で寝る」ことではない。それは一つの「生活」であり、それゆえその生活を維持していくためには様々な能力や経験が必要とされる。衣食「住」の調達、身の安全の確保、さまざまな社会的関係の調整といった「普通の」市民生活において必要とされることは、野宿生活においてもまた必要なのである。それゆえ、野宿生活とは決して「気楽な」「自由な」ものではない。そして、このようなものとしての野宿生活（者）のありようは千差万別である。野宿生活に至る経緯や過去の職業的キャリア、年齢や性別、健康状態、そしてどの程度野宿生活に「習熟」しているのかといったことに規定されて、「現在の」野宿生活のかたちはさまざまに異なっている。すなわち、野宿生活の根底には、そのありようを規定しているさまざまの要因がひそんでいるのである。

当然のことながら、今回の野宿生活者に対する聞き取り調査において、この「野宿生活」の規定要因のすべてについて調査できたわけではない。私たちが話を聞くことができたのは、衣食「住」や健康状態などの野宿生活の基本的な諸側面だけである。こうした側面について、これから順次報告していくわけであるが、ここではまず最初に、野宿生活の具体的なかたちの基本的な枠組みを構成していると考えられる次の４項目についてまとめておこう。

○「釜ヶ崎」での就労・求職経験の有無（「釜経験」）

○聞き取り時点での野宿期間（「野宿期間」）

野宿期間が１カ月未満を「短期」、１カ月以上１年未満を「中期」、１年以上を「長期」としてコード化した

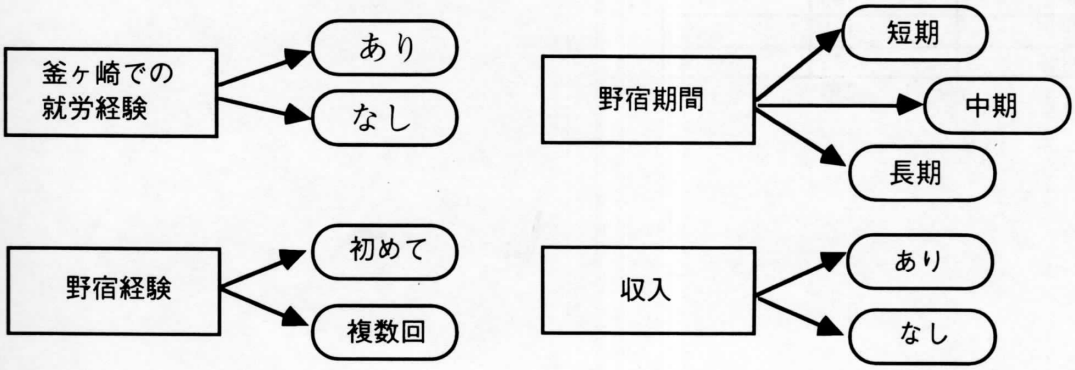
○聞き取り時点までの野宿経験の有無（「野宿経験」）

調査時点での野宿が「初めて」の野宿であるのか、それとも過去に野宿したことがあるのか、ということである。

○聞き取り時点での収入形態（「収入」）

これらの４項目のカテゴリーを図示したのが（図１）である。なおをこれらの４項目、野宿生活の枠組みを構成する基本的な要因として選択した理由については、後の報告・分析において述べることとする。

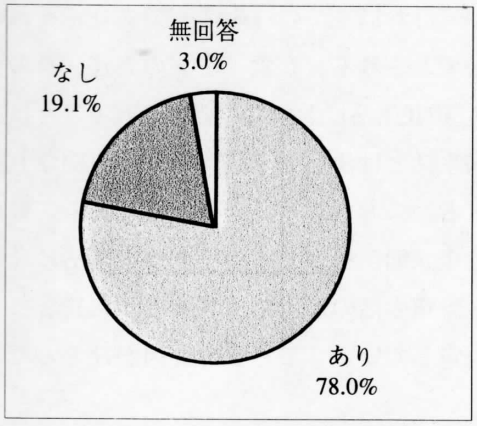
（図1）



次に、この４項目についての単純集計を見ておこう。

●釜ヶ崎での就労経験の有無

（図2）

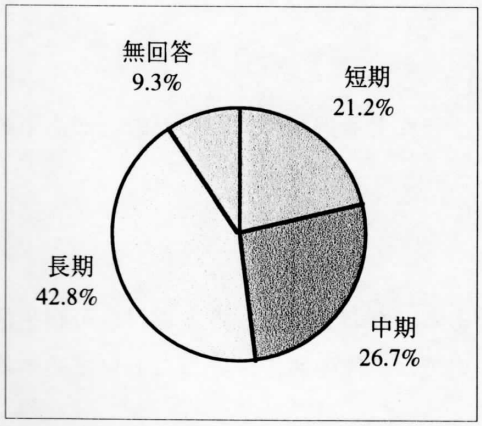


あり	184	78.0%
なし	45	19.1%
無回答	7	3.0%
合計	236	

大阪市における野宿生活者の場合、「釜ヶ崎での就労経験」の有無が野宿生活のありようを規定する重要なファクターとなってくる。今回の聞き取り調査では約八割の野宿生活者が「釜経験」があると答えている（図２）。

●野宿期間

（図3）

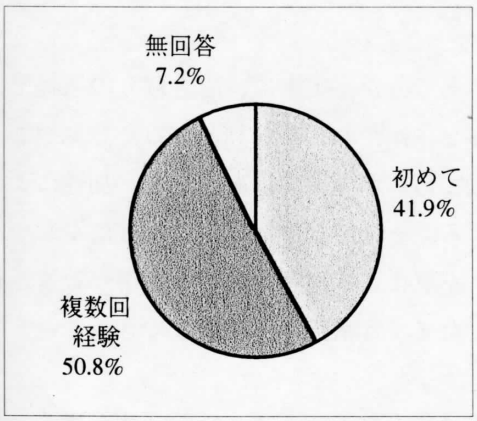


短期	50	21.2%
中期	63	26.7%
長期	101	42.8%
無回答	22	9.3%
合計	236	

野宿期間が１年以上の長期にわたる野宿生活者が40％以上を占めており、最も多くなっている。野宿生活の長期化は必然的に肉体の磨滅と社会関係の希薄化をもたらすと予想され、しかも先に見たように野宿生活者の多くが５０歳以上の高齢であることを考えるならば、この数字は看過することのできない深刻な問題状況が存在しているということを告げているのではないだろうか。

●過去の野宿経験

（図4）

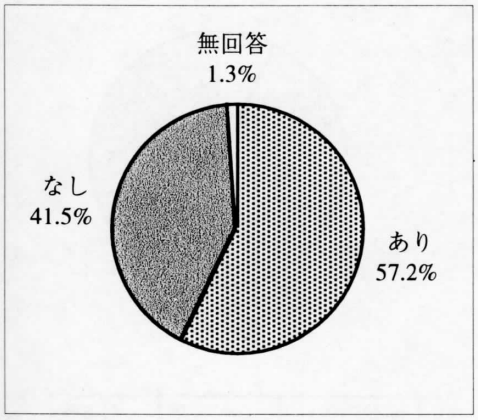


初めて	99	41.9%
複数回経験	120	50.8%
無回答	17	7.2%
合計	236	

ここでも、半数以上の野宿生活者が過去に1回以上の野宿を経験したことがあると答えている。すなわち、この数字は野宿生活を「繰り返し」ている人々が少なからず存在するということを示している。そうした人々にとっては、野宿とは何らかの偶発的な原因によって引き起こされる「事故」ではなく、いわば「構造的な」要因によってもたらされていると考えられる。何がこの「繰り返し」をもたらしているのかが探られる必要があろう。

●「収入」の有無

（図5）



あり	135	57.2%
なし	98	41.5%
無回答	3	1.3%
合計	236	

野宿「生活」とは一つの「生活の型」であって、決して無秩序かつ恣意的なものではない。さらに言えば、それは「構造」を有しているのであり、こうしたものとしての野宿生活のありようを規定しているのは、生活資源を得るための主要な手段としての「収入」である。確かに、その「収入の額」はとぼしく、それゆえそれのみによって生活を維持していくことは困難であるとしても、野宿生活者の「収入」はその生活の基底にある重要なファクターなのである。今回の調査では60％弱の野宿生活者が「収入がある」と答えている。そして、その主要な収入源は「廃品回収」と「建設・土木の日雇い労働」である。この点については、後にもう少し詳しく報告・分析することとする。

以上の野宿生活を規定する4項目の要因を前提として、以後、野宿生活の具体的なディテールについて詳しく見て行こう。

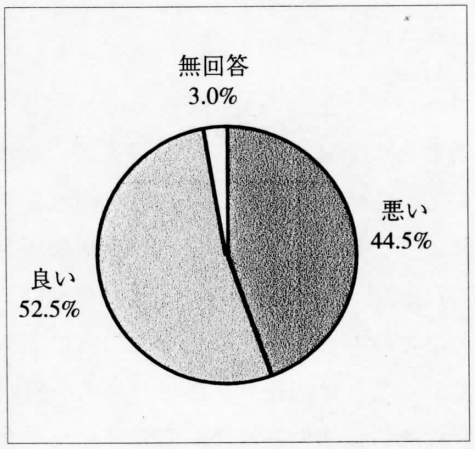
2．野宿生活者の健康状態

（1）現在の健康状態

野宿生活による健康への影響はどのようにあらわれるであろうか。実際に、聞き取りの過程でよく「一月も野宿すると体をこわしてしまう」、「野宿すると体がだめになる」といった意見がよく聞かれた。そうした野宿生活者の中には、長年の現業労働で何らかの労災にあったり、加齢による衰えといった身体上の事情を抱えたひとびとも多数存在する。そうしたひとびとは、もはやかつてのように過酷ともいえる労働には耐えられない。同時に、不況による高齢労働者の雇用が敬遠される傾向とも相まって、何らかの身体上の障害や不調を抱えたまま野宿生活を余儀なくされているひとびとが存在することも忘れてはならない。

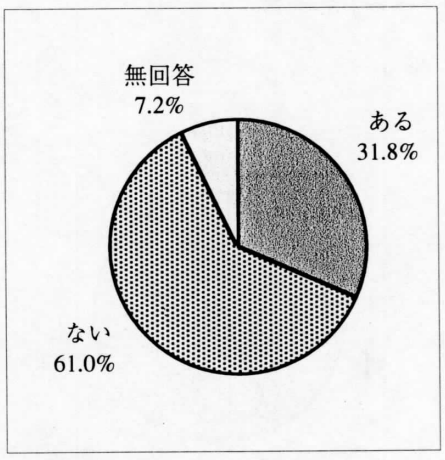
つまりここで取り上げられるひとびとには、「野宿過程で体を悪くしたひと」と「体を悪くして野宿せざるをえないひと」がいるのである。そうした野宿生活者の健康状態を、調査結果から概観してみることにする。

健康状態：単純集計



悪い	105	44.5%
良い	124	52.5%
無回答	7	3.0%

入院経験の有無：単純集計



ある	75	31.8%
ない	144	61.0%
無回答	17	7.2%

「現在の健康状態」についてたずねた単純集計の結果は上のとおりである。

「良い」とこたえたひとの割合が半数以上を占めているが、「悪い」とこたえたひともやはり半数近くいることに注目したい。半数近くの野宿生活者が体調の不備を訴えていることになる。

（2）野宿生活と入院歴

次に、過去の経験も踏まえて現在までに病院などに入院した経験の有無をたずねた結果を掲げておこう。

これまでに入院経験があるとこたえたひとが全体の三割強をしめしているが、ほとんどのひとは

入院経験がないとこたえている。

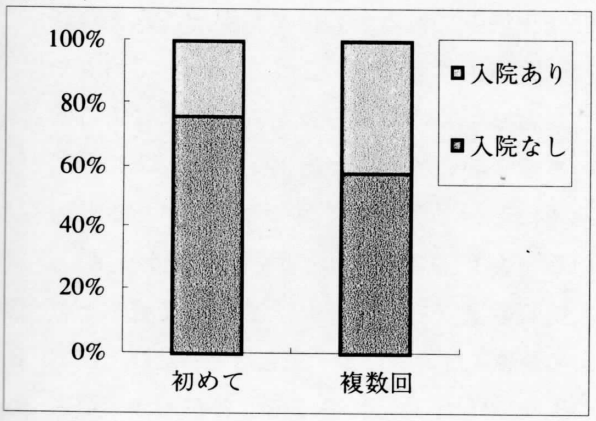
では、入院経験のあるひとたちはどのような経歴をもつひとたちであるのかを見てみることにする。

入院経験のあるひと（75人）に関して、「野宿経験（209ケース：図1）」「野宿期間（203ケース：図2）」「釜経験（215ケース：図3）」の項目をクロスさせたものが次のグラフである。それぞれ無回答は省いてあるため236ケース全体の集計ではない。

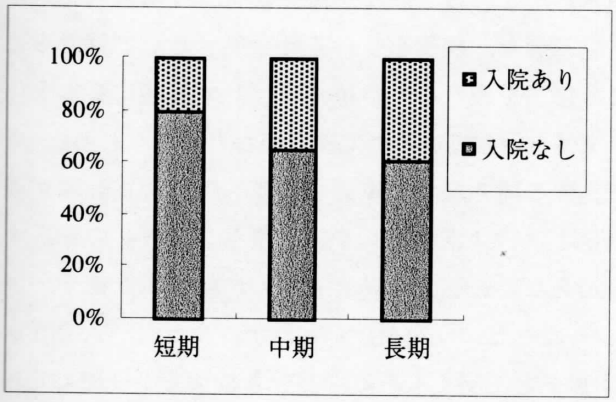
この集計からえられた結果、入院経験のあるひとの特徴は「釜経験があり」、「野宿生活は長期間複数回にわたる」ひとであるとすることができよう。もちろん入院経験があるひとたちが、これら全ての項目を合わせ持つわけではないが、体調に不安を抱えたひとたちこそが、過酷な野宿生活を強いられていることがここから読み取れるのではなかろうか。

また入院経験と健康状態の項目をクロスさせた結果をみると、入院経験のあるひとは現在でも健康上の不調を抱えていることがわかる（図4）。実際に聞き取りの中でも、「入院したが完治していないまま退院した」という意見はよく聞かれた。また野宿生活の間に入院した経験のあるひとは、健康保険等を持たないために、長期加療が必要な傷害や疾病をかかえても、入院はおろか通院すら不可能なまま一時的な手当のみで現在に至っている。現在でもそのために、何らかの後遺症に悩まされている野宿生活者が数多く存在していることも聞き取りからうかがうことができた。

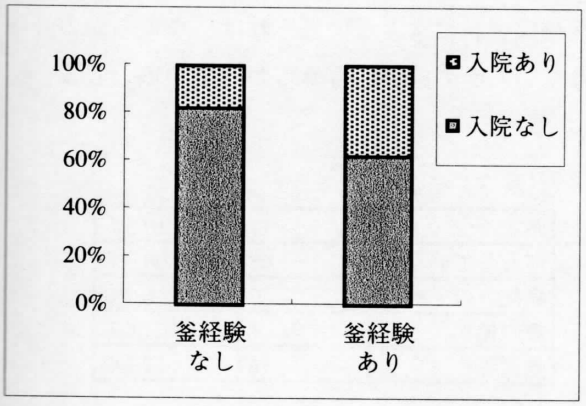
（図1）



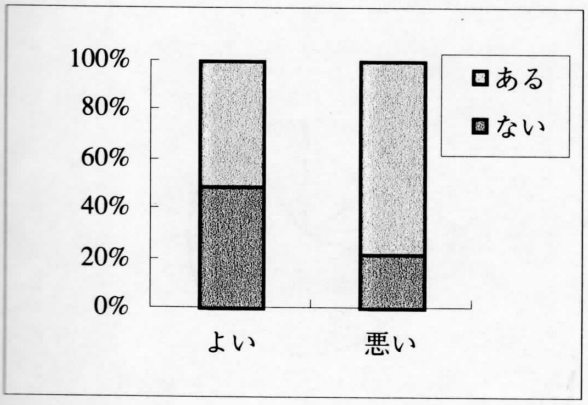
（図2）



（図3）



（図4）



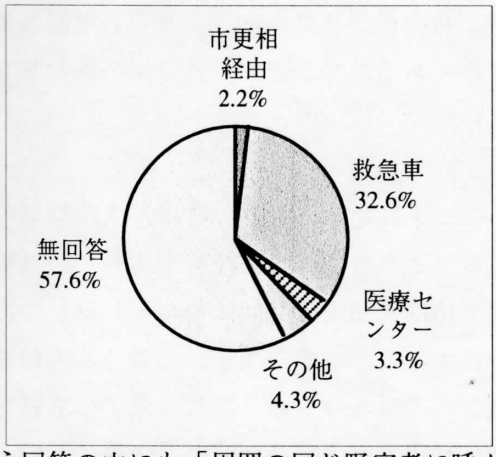
（3）野宿生活と医療保護―救急車による搬送―

野宿生活中で何らかの傷害や疾病にみまわれたときに、野宿生活者はどのようなルートで治療や保護へとたどり着くのであろうか。救急車による搬送経験の有無を聞いてみると約32パーセントのひとが、緊急手段として救急車に頼った経験があると回答している（表1、図5、非該当を除く92ケース）。

（表1）

市更相経由	2	2.2%
救急車	30	32.6%
医療センター	3	3.3%
その他	4	4.3%
無回答	53	57.6%

（図5）



入院経験者（75ケース）との関係で見ると救急車による緊急入院というルートをたどったひとが40パーセント（30ケース）にのぼることがわかる（表2、図6）。これは公的な医療保護を受ける術のない野宿生活者が、保護を受ける「手段」として救急車による搬送を頼りにし治療が辛うじて可能になるという実情を示しているのではないかと考えられる。

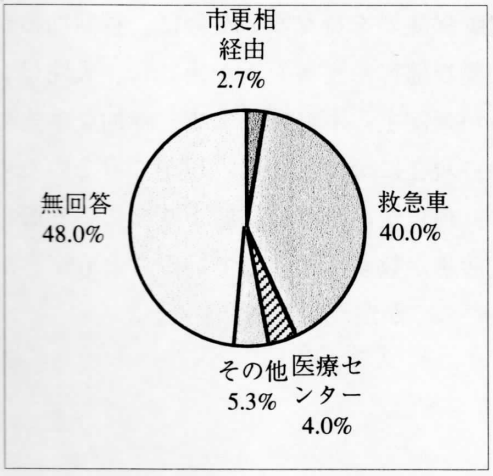
実際の聞き取りの声の中には、特に野宿経験が浅いひとは、「市更相」や「医療センター」の存在すら知らないと答えたひともいた。救急車を使うという回答の中にも「周囲の同じ野宿者に呼んでもらった」という声がきかれたが、たった一人で野宿していたさいに緊急時に陥ったときは、この「手段」とて脆くもあることもあわせてつけ加えておきたい。

救急車などで治療を受けてもそれは一時的な「医療保護」にすぎない。それは、なんらかの身体の不調を訴えるひとが、現在何らかの治療等をうけているかの回答にもあらわれている（表3、図7）。

（表2）

市更相経由	2	2.7%
救急車	30	40.0%
医療センター	3	4.0%
その他	4	5.3%
無回答	36	48.0%

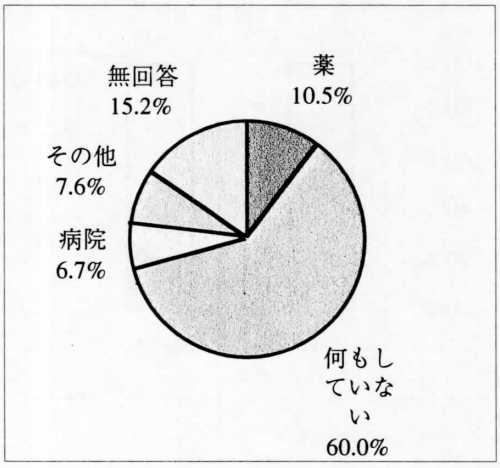
（図6）



（表3）

薬	11	10.5%
何もしていない	63	60.0%
病院	7	6.7%
その他	8	7.6%
無回答	16	15.2%

（図7）



現在も投薬や通院によって治療を継続していると回答したひとは16パーセントほど存在するが、何も治療をおこなっていないという回答が六割を示している。聞き取りの中でも、「リハビリをせずに病院を出てきたものだから、今でも足がちゃんと動かない」という回答も聞くことができた。こうした事実と、本節冒頭であげたような野宿生活という過酷な条件下での身体の磨耗とが、野宿生活者の健康状態を劣悪にしている事実が浮かび上がってくるのである。

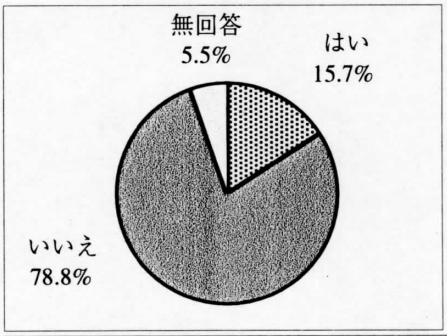
3．野宿生活者の生活形態―「食」と「収入」の面から―

（1）野宿生活での食事の確保

衣食住というように、人間が生活するうえで食べることは前提とされる行動の一つである。しかし、野宿生活を強いられているひとたちにとってそうした生活の根本を支える行動、とりわけ「食べること」については切実な問題を抱えている。1995年の聞き取り調査では、食事をどのようにとっているのかについて「自炊」「炊き出し」「残飯」「店舗（コンビニエンスストアなど）の廃棄品」「その他の食事」の５項目から聞き取りをおこなった。それぞれの単純集計は次のとおりである（合計は236ケース）。

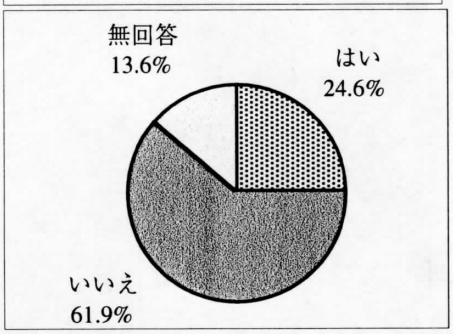
【自炊】

はい	37	15.7%
いいえ	186	78.8%
無回答	13	5.5%



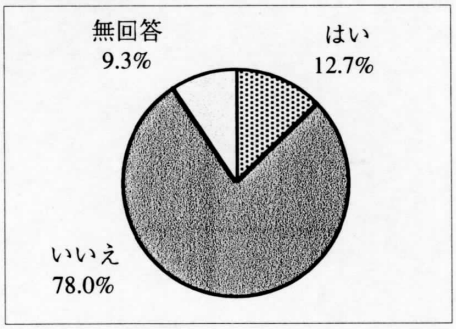
【コンビニ】

はい	58	24.6%
いいえ	146	61.9%
無回答	32	13.6%



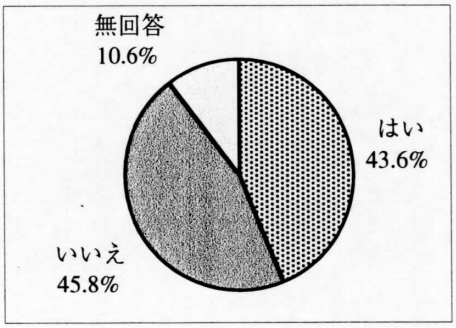
【残飯】

はい	30	12.7%
いいえ	184	78.0%
無回答	22	9.3%



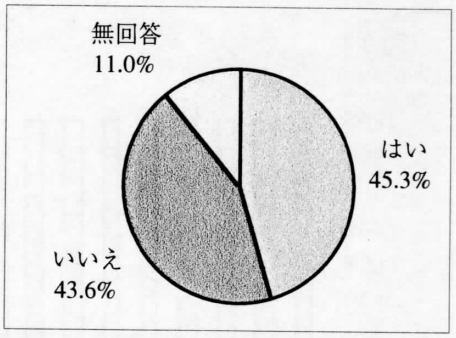
【炊き出し】

はい	103	43.6%
いいえ	108	45.8%
無回答	25	10.6%



【その他の食事】

はい	107	45.3%
いいえ	103	43.6%
無回答	26	11.0%



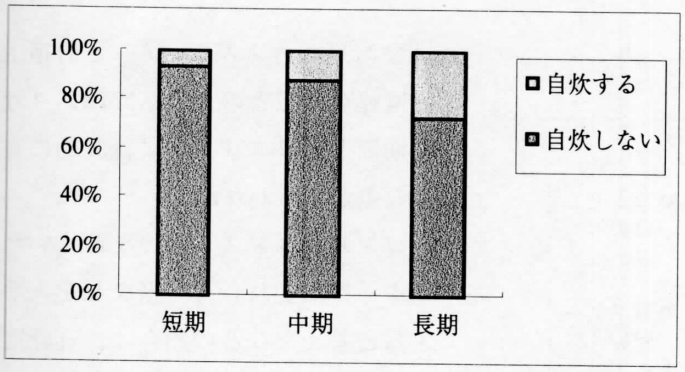
全体の傾向としては、「炊き出し」と「その他の食事」が四割以上の割合をしめている。しかし、常にこの手段で食事をとっているわけではなく、実際はそのときおかれている立場で可能な手段を選択していることが考えられる。したがってこれをもって野宿生活者の生活（食）の全体像と決定することには限界があることを付言しておきたい。

また、ここで「その他の食事」というのは、飲食店で食事をすませていたり、パンなどを購入して食事をしていることを意味する。食事は他の野宿生活の側面とどのような関わりがあるのだろうか。以下では「野宿期間」「野宿経験」「釜経験」「収入の有無」「エリア」の項目との関わりから、野宿生活像を概観していくことにする。

（2）野宿生活と食事

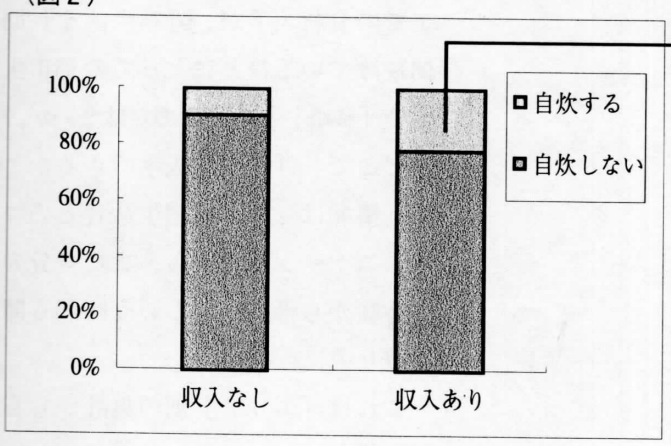
（2）—1：自炊

（図1）

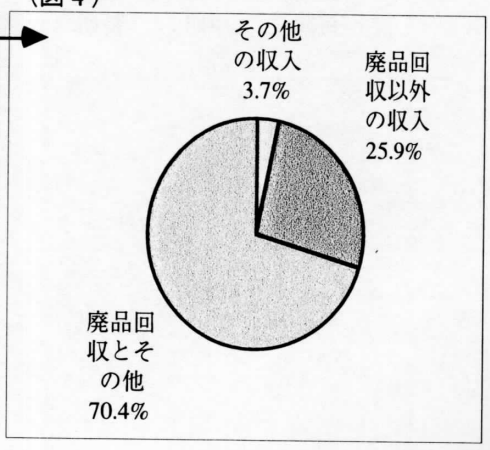


「自炊」については単純集計にみたように全体の割合から見ると、それほど割合として高いものではない。しかし、野宿生活に関わる項目とクロスしてみると、「自炊」が野宿生活と密接な関わりを持つ食事手段であることがわかる（「野宿期間」204ケース：図1、「収入」222ケース：図2、「エリア」223ケース：図3、いずれも無回答は省いてあ

（図2）



（図4）

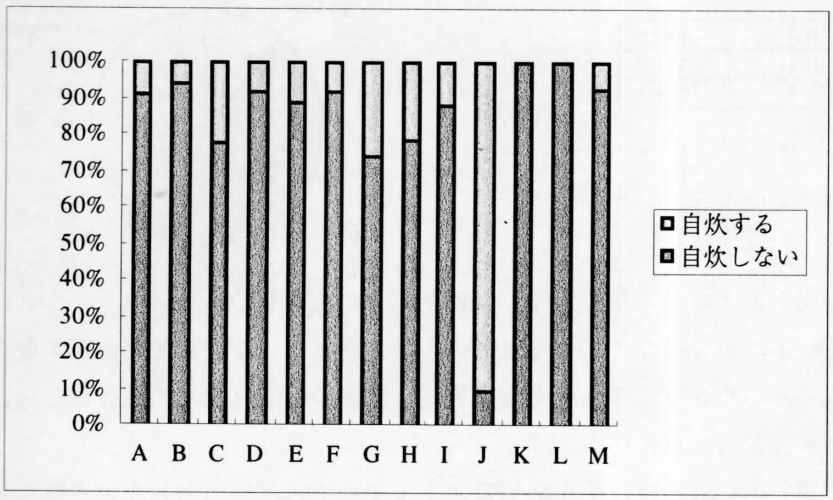


る）。

図示したように各項目とのクロス集計から読み取れるように、野宿期間が長期にわたり、収入があるひとが自炊で食事を賄っている傾向があることがわかる。

さらに「収入あり＋自炊（28ケース）」のひとびとの収入源をみたのが上の円グラフである（無回答1ケースを除く27ケース：図4）。

（図3）



ここでは「自炊」と回答した「収入のある」ひとは主として廃品回収（ダンボールやアルミ缶など）によって生計をたてている人であることが示されている。

またエリア別の分析結果では「Ｊエリア（大阪城公園）」で「自炊」と回答した割合が高いことが示されている（図3）。

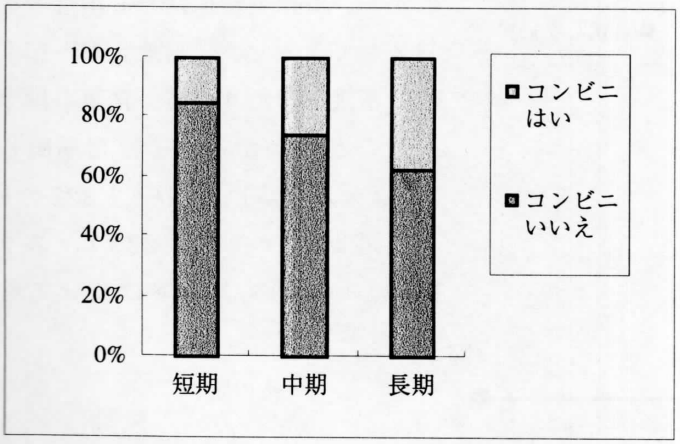
（2）—2：コンビニエンスストア

「コンビニエンスストア」と野宿生活関連の項目とのクロスでは、「野宿期間」と「エリア」に統計的に有意な差があらわれた。

コンビニエンスストアなどでいわゆる「期限切れ」の弁当などを入手すると答えたひとの割合は、「野宿期間」に比例して増えている（図5）。ここからコンビニエンスストアでの食料入手が、野宿生活を長期間続けているひとにとっての都市生活の「戦略」といえるのではないか。「どこで」「何が」入手できるかという情報は、他の野宿生活者とのコミュニケーションから、また自分の実体験から得ていくという回答も聞き取り中に存在した。

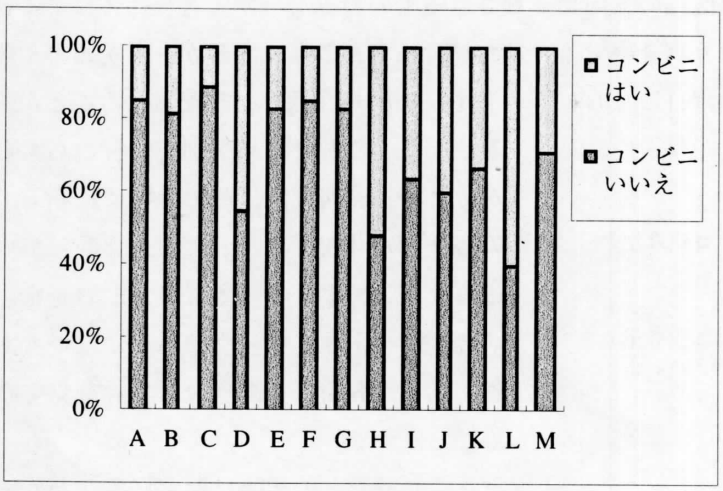
これは「エリア」別の集計からも

（図5）



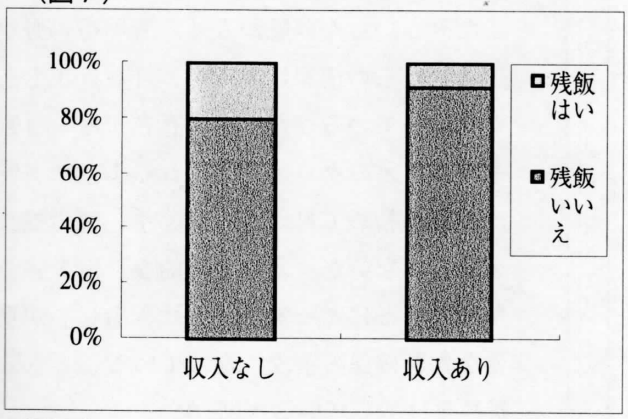
わかるように、「L（あべのベルタ付近）」「H（難波周辺）」「D（あべの筋）」といった繁華街からの聞き取りによって得られた回答に多いことからもうかがえる（図6）。

（図6）



（2）—3：残飯

（図7）

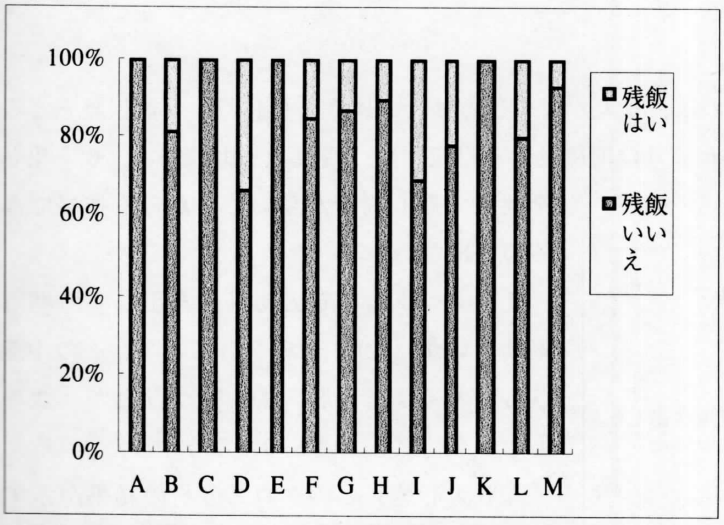


「残飯」については単純集計の回答割合の低さが物語るように、これを食事の入手手段としているひとは多くない。聞き取りの回答からも聞かれたように、残飯を食事の手段とすることには忌避や抵抗があることが数字の上からも示されている。

同様にこれも各項目とのクロスを見てゆくことにする。統計的に有意な差があったものは「収入」と「エリア」の項目においてである。

収入のある層に残飯が少ないのは、「その他の食事」が多いためである（図7）。購入資金があるために残飯を利用する必要はないということであろう。聞き取り調査においても収入のあるひとは「買って食べるお金があるので残飯をあさろうとは思わない」という言葉がよく聞かれた。これは残飯への抵抗感を示すと考えられる。

（図8）

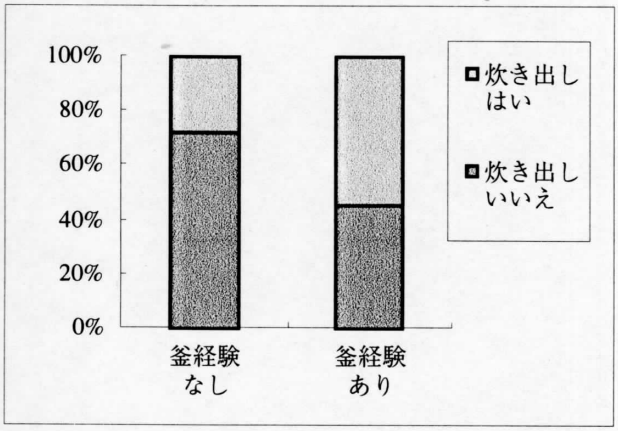


エリア別に見ると「D（あべの筋）」が高率でこれも先のコンビニエンスストア同様、繁華街という地域の特色をあらわしていると考えられる（図8）。

（2）—4：炊き出し

ここでいう「炊き出し」とは、西成区内の公園で実施されるもののみならず、各種団体による移動炊き出しも含まれる。これは聞き取り調査中でもたびたび耳にしたことであるが、恵美須町や難波はては堺市といった地域に、特定の曜日に「おにぎり」や「衣服」「毛布」を配布することがあるそうだ。これはエリア別の分析からもわかるように、西成区以外の地区に野宿しているひとが「炊き出し」の恩恵を受けているのは、このような「釜以外」での野宿生活者支援のネットワークがあるからでもある。以下、各項目とのクロス集計を見てゆくことにする。

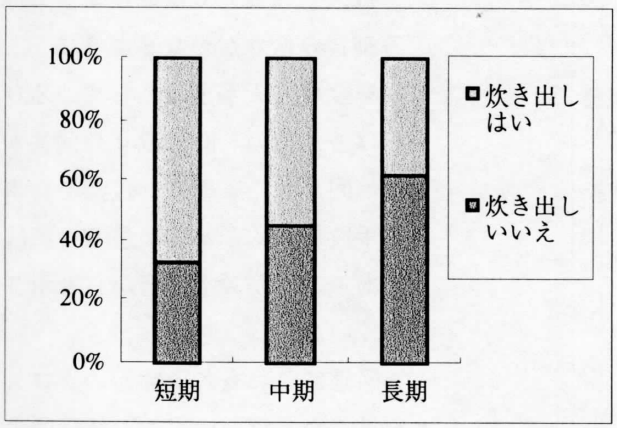
（図９）



「釜経験」との相関は顕著にあらわれている（図９）。これは西成区内でおこなわれている「炊き出し」の利用者が、「釜ヶ崎での就労経験」の有無と密接なつながりがあることを物語っている。

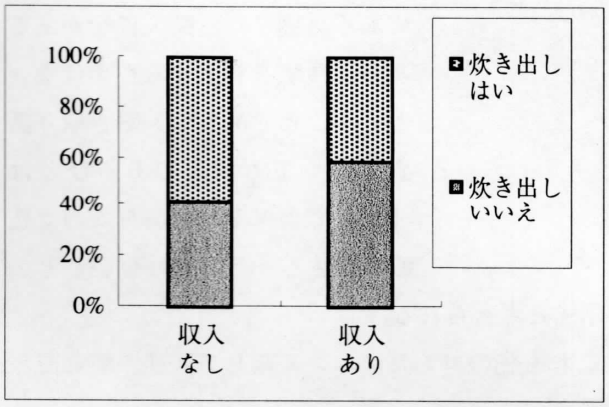
またそういった経験がなくとも周辺の野宿生活者からの情報によって、「炊き出し」を利用しているひとたちも存在する。「野宿経験」とのクロスに見られるように、特に野宿を初めて日が浅いひとや、就労機会を得られないがゆえの一時的な野宿を強いられるひとにとっては、「炊き出し」が重要な食事確保の手段になっていることも分析結果は示している（図10）。

（図10）



「収入の有無」とのクロス集計が示すのは、収入がないひとは、「炊き出し」という選択肢をとる傾向にあるということである（図11）。これは前に見た「自炊」や「残飯」と比較して「炊き出しを利用する」割合が高いことからも推察できるのではないか。

（図11）



「収入のある」ひとも「炊き出し」の利用率は多いが（49ケース：41.5%）、その中でさらにどのような収入源を持つひとが「炊き出し」を利用しているのだろうか。

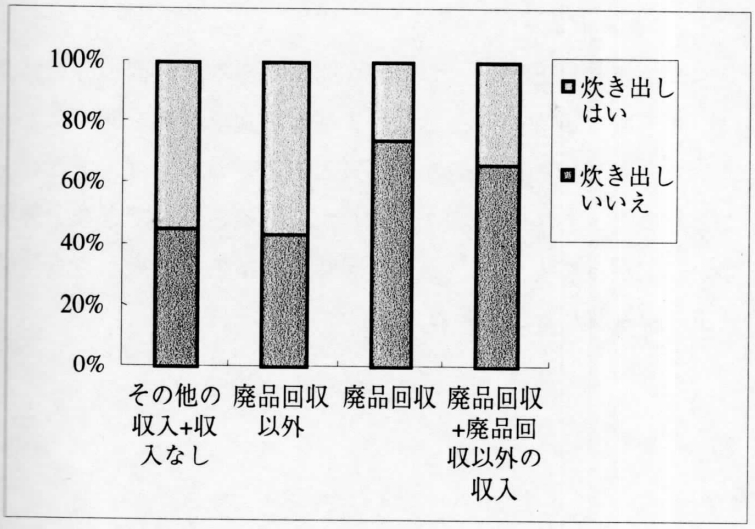
「収入形態」とのクロス分析の結果が示すように、「廃品回収以外の仕事」によって収入を得ているひとに「炊き出し」利用率が多

いことが分かる（図12）。

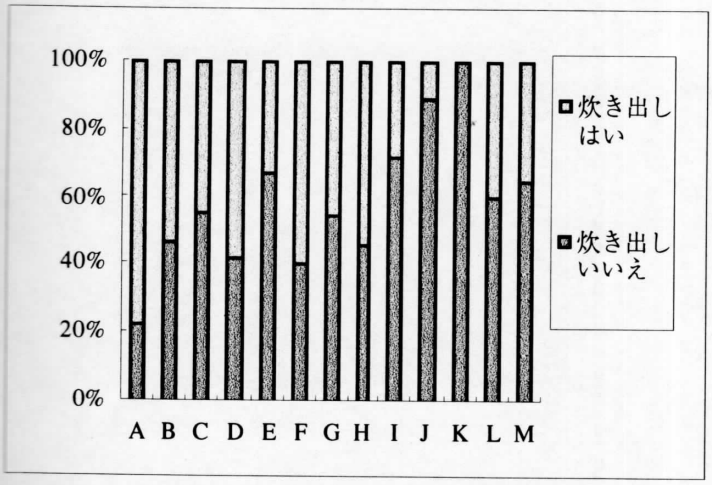
これも前に確認したように、「廃品回収」を収入の糧としているひとは「自炊」の傾向が高かったことから、ここでは反対に「日雇仕事」や、大阪府や大阪市が実施している「特別清掃事業」「その他の雑業（店舗の片づけ等）」といった定期的な就労が確保しにくい仕事による収入を得ているひとが、「炊き出し」を利用していることを示している。

エリア別での分析結果からは、「A（阪堺軌道恵美須町駅周辺）」「D（あべの筋）」「F（日本橋でんでんタウン）」といった地点での聞き取り結果の回答に、「炊き出し」利用率の高さが見られる。これは、これらの地点が前に述べたように、各種団体の「炊き出し」や西成区内の「炊き出し」とを両方利用できる地点であることを特徴づけているように思われる（図13）。

（図12）



（図13）

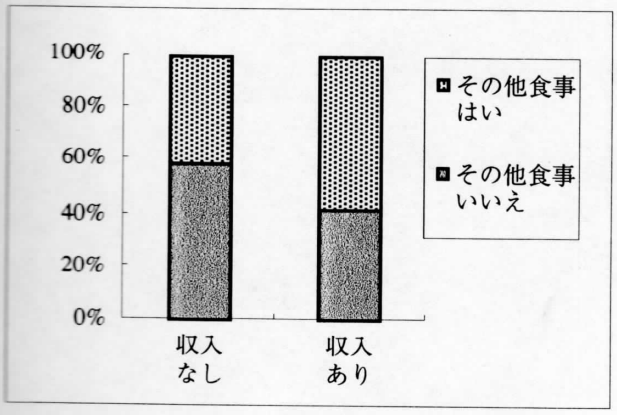


（2）―5：その他の食事

最後に「その他の食事」をみることにする。これは飲食店で食事をおこなうことを含むものである。聞き取り中でも「食事についてはどうされているのか」という質問に対して、「自分で買ってきて食べる」「店に食事しに行く」といった回答は多く聞かれた。実際にそうした食事の形態が分析にあらわれるのかを確認してみよう。

「収入の有無」とのクロスで示されるように、収入があるひとは、おもに外食で食事面をしのいでいることが読み取れる（図14）。他の項目については統計的な有意差はなかったが、野宿期間とのクロスをみてみると、「短期型」の野宿生活者は「炊き出し」や「その他の食事」によって食事を確保していることが分かる。

（図14）



＊＊＊＊＊

食事の確保は、野宿生活を余儀なくされるひとびとにとって重大な問題である。今回の分析結果では触れられなかったものの、実際に、聞き取り調査の過程ではさまざまな食事形態を聞くことができた。一例をあげれば、コンビニエンスストアでの期限切れの弁当入手にさいしては、そこにあたかも「暗黙の契約」があるようなことも事実としてある。「外側」から見ることのできない野宿生活のあり方の一端がこの分析から浮かび上がってくるが、それは同時に野宿生活の厳しさも同時に描き出すことにつながることが結果から読み取れると思われる。

4．野宿生活者の社会的関係

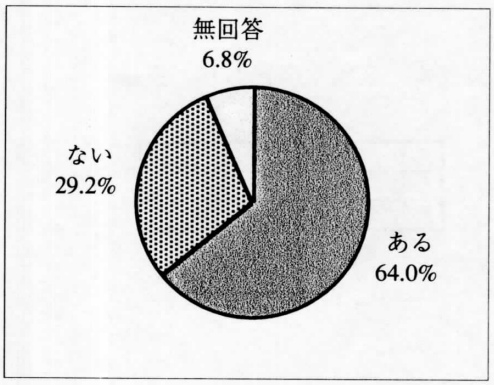
野宿生活には、屋内での生活とは異なるがゆえの様々な困難が付随する。そうした野宿生活を営む上で、友人や知人等とのつながりといった社会的関係は、非常に重要な意味を持つものと考えられる。本節では、今回の調査結果から大阪市中南部における野宿生活者の社会的関係の有り方を見ることにしたい。

(1)　野宿生活における社会関係の概要

まず、今回の調査結果より、野宿生活における社会関係の概要を見ることにする。それぞれの単純集計は以下のとおりである。

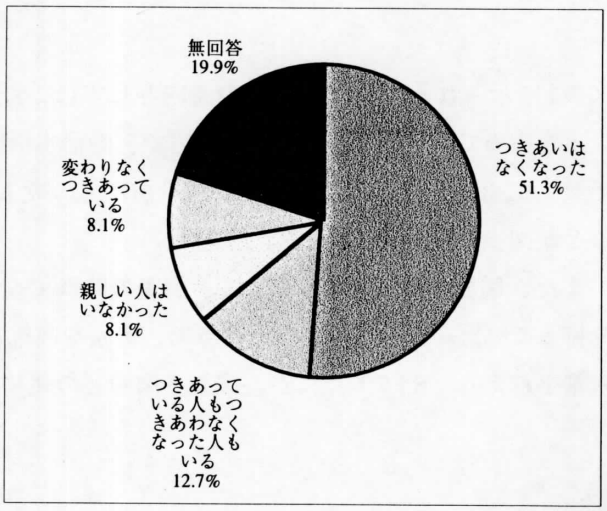
（図表１　野宿生活の中での友人の有無）

ある	151
ない	69
無回答	16



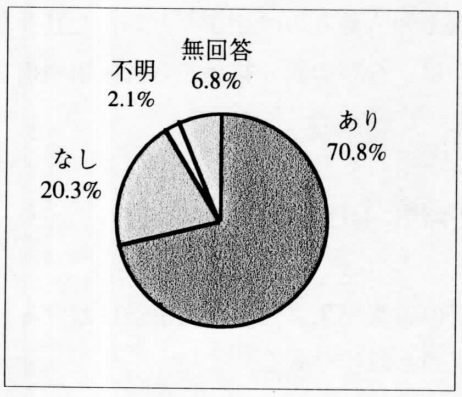
（図表２　野宿生活以前の友人との関係）

つきあいはなくなった	121
つきあっている人もつきあわなくなった人もいる	30
親しい人はいなかった	19
変わりなくつきあっている	19
無回答	47



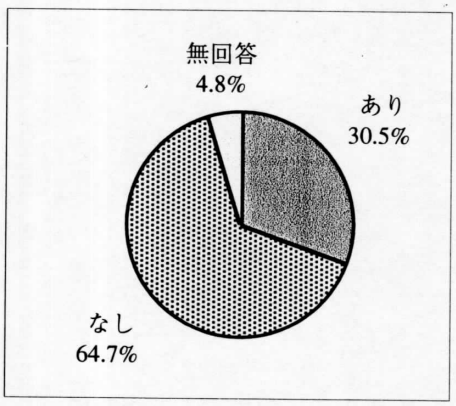
（図表３　家族や肉親の有無）

あり	167
なし	48
不明	5
無回答	16



（図表４　家族や肉親あり／連絡）

あり	51
なし	108
無回答	8



図表1に示されるように、全体の傾向としては、野宿生活を通じた友人関係を持つ人が全体の六割以上を占めている。しかし、その一方で、野宿生活以前からの友人との付き合いがなくなった人は、半数（51.3％）を占めており、それ以前からの友人関係を保持している人はわずか８％にすぎないことが図表2からうかがえる。

また、図表3に示されるように、調査の時点で全体の七割（70.8％）の人が何らかの家族や肉親を持っていた。それらの人びとのうち、家族や肉親と連絡を保っている人は三割（30.5％）であり、六割を越える（64.7％）人が、家族や肉親との連絡をとっていない状態である（図表4参照）。

(2)　野宿生活の経験と期間

野宿生活者の社会関係にとって、次の二つの側面が重要な意味を持つことが今回の調査結果からうかがえる。第一には、野宿生活をそれ以前に何度か経験したことがあるか否かという「経験」の側面である。第二には、野宿生活の「期間」の長短という側面である。以下では、これらの二つの側面から野宿生活と社会関係のあり様を見ることにしたい。

(2) -1　野宿生活の期間と友人との関係

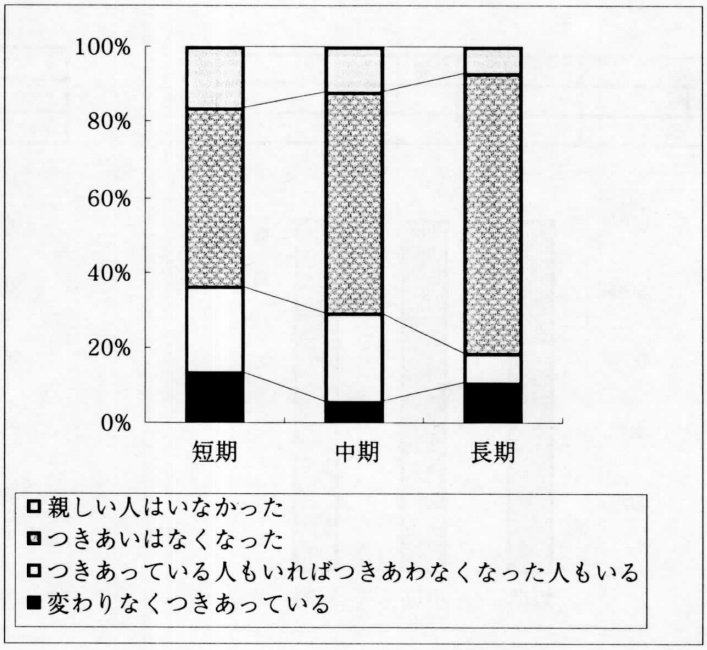
ここでは野宿生活の期間と友人関係の間の連関を見ることにする。なお、ここでは野宿生活の「期間」を「短期：一ヶ月未満」、「中期：一ヶ月以上一年未満」、「長期：一年以上」のそれぞれに分類してある（以下の分析においても、「期間」の分類は、これに従うものとする）。

図表5に示されるように、野宿生活の期間と友人関係を見ると、野宿期間が長くなるにつれて、「以前の友人」との関係が希薄になってゆくことが、明らかに示されている。

それとは対照的に、野宿生活の期間が長くなるにつれて新たな友人関係が構築される傾向が図表6からもうかがえる。

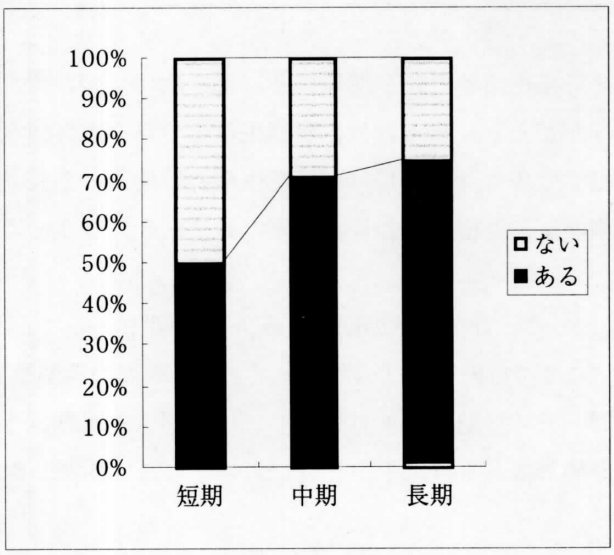
(図表5　以前の友人との関係)

	短期	中期	長期
変わりなくつきあっている	6	3	9
つきあっている人もいればつきあわなくなった人もいる	10	12	7
つきあいはなくなった	21	30	64
親しい人はいなかった	7	6	6



（図表６　野宿生活を通じた友人関係）

友人	短期	中期	長期
ある	24	44	71
ない	24	18	24

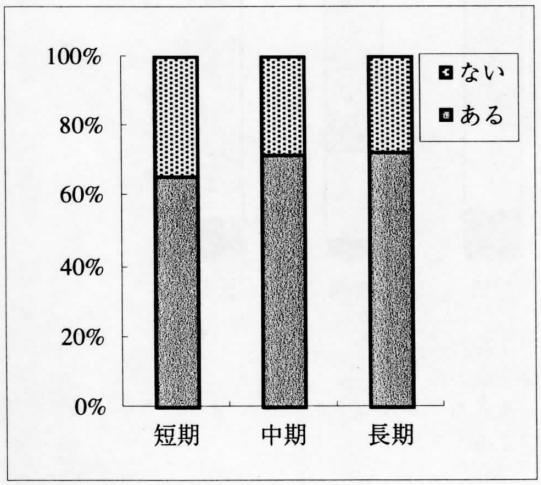


(2) -2　野宿経験と友人関係

次に、「過去に複数回、野宿生活を経験」している層と「今回の野宿が初めて」の層のそれぞれについて、野宿生活の経験の有無と野宿生活を通じた社会関係のあり方の関係を見てみたい。

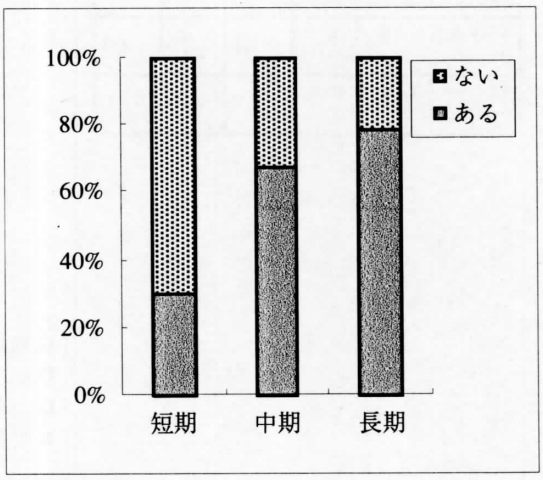
（図表7　野宿経験と友人関係）
但し、「過去に複数回の野宿を経験」した人についてのみ

友人	短期	中期	長期
ある	17	18	37
ない	9	7	14



（図表8　野宿経験と友人関係）
但し、「今回の野宿が初めて」の人についてのみ

友人	短期	中期	長期
ある	6	23	33
ない	14	11	9



「野宿期間」と「友人の有無」との関係は、「過去に複数回の野宿を経験」した人びとの場合、それほど有意な差が見られなかった（図表7参照）のに対して、「今回の野宿が初めて」の人びとに有意な相関関係が見られた（図表8参照）。

すなわち、「今回の野宿が初めて」の人々の中で、野宿期間が短い人は野宿生活を通じた「友人なし」と答える比率が高くなっている。そして、その中で野宿生活が長期化するほど、野宿生活を通じた「友人あり」と答える人が増えているのである。

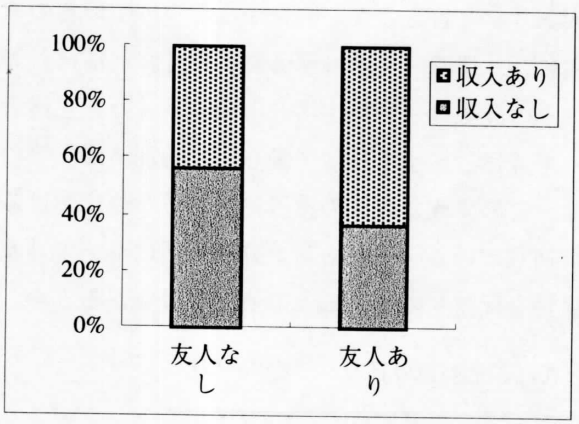
これらのことは、時間の経過とともに、とりわけ、「今回の野宿が初めて」の人びとを中心に新たな社会関係が形成されていくことを示していると考えられる。

(2) -3 友人関係の有無と収入の関係

ここでは、野宿生活において友人を持つことの意味合いを「収入」という側面から見ることにする。すでに前節の「収入」の項で述べられていたように、野宿生活者の約57%が幾らかの収入を得ていたが、そのような収入の獲得に際しても友人とのつながりは重要であると推察される。

（図表9　収入の有無と友人の有無との関係）

	友人なし	友人あり
収入なし	39	55
収入あり	30	95

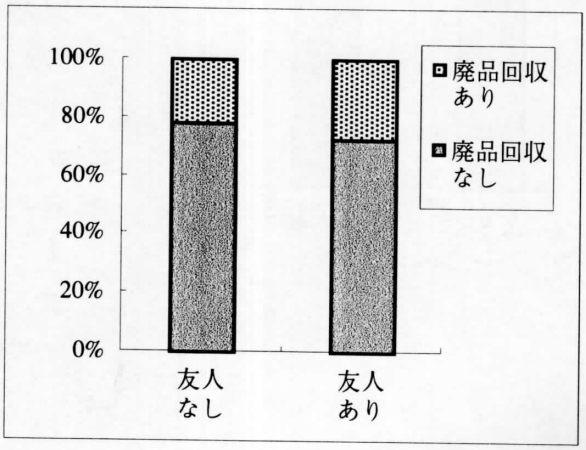


図表9に示されるように、今回の調査結果からは、「収入の有無」と「友人の有無」の間には統計的に有意な関係が見られる。「収入あり」と答えた人の中で、「友人あり」と答える人の割合が高い。

さらに、収入の獲得形態ごとに友人関係の有無を見た場合、以下の結果が得られた。

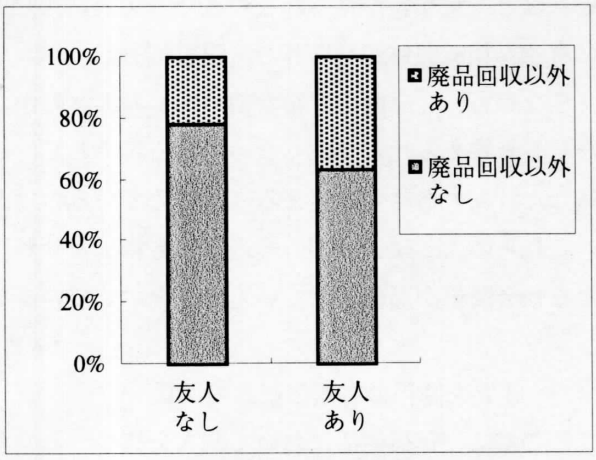
（図表10　廃品回収の有無と友人の有無）

	友人なし	友人あり
廃品回収なし	52	10
廃品回収あり	15	40



（図表11　廃品回収以外と友人の有無）

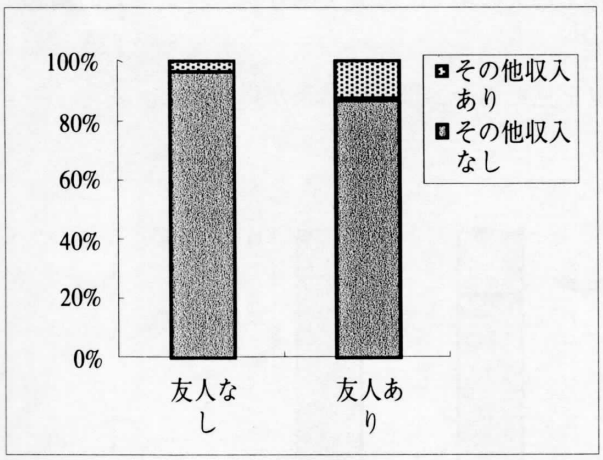
	友人なし	友人あり
廃品回収以外なし	54	89
廃品回収以外あり	15	51



「廃品回収の有無」と「友人の有無」との間の関係については、両者の間に統計的に有意な差が見られなかったものの（図表10参照）、「廃品回収以外の有無」と「友人の有無」との間には明らかに統計的に有意な差が表れている（図表11参照）。「廃品回収以外の仕事へ従事」している人中で「友人あり」と答える人の割合が高くなっているのである。ここでいう「廃品回収以外の仕事」とは、主に、「建設・土木日雇労働」や「特別清掃」等の釜ヶ崎地域を斡旋・就労の場とするものを指す。その詳細は「野宿生活者の類型」「野宿生活者の収入と仕事」の項にゆずるが、野宿生活者にとって「建設・土木日雇労働」や「特別清掃」等の仕事に従事できる可能性は、極めて限定されている。このような収入の獲得には、釜ヶ崎におけるさまざまな「社会的諸資源」の諸相に、ある程度、通じている必要がある。野宿生活において「友人」を持つことは、そのような「釜ヶ崎」との関係性を保持していることの表れではなかろうか。

（図表12　その他の収入と友人の有無）

	友人なし	友人あり
その他収入なし	65	120
その他収入あり	2	17

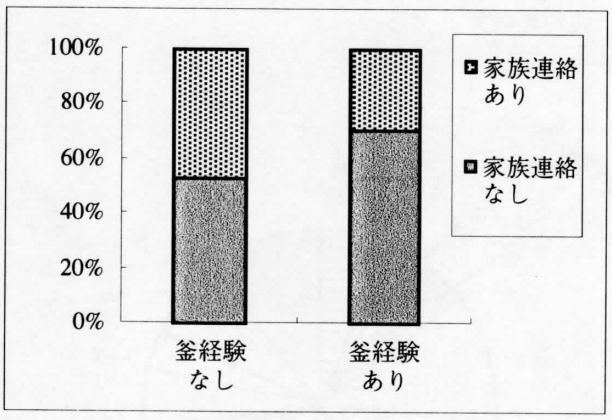


次に、図表12にあるように、「その他の収入の有無」と「友人の有無」との関係について統計的に有為な差が見られた。ここでの「その他の収入」とは、必ずしも上記のように釜ヶ崎を媒介にした仕事を含まず、むしろ繁華街等での（古）雑誌売り、占い、テレホンカード収拾などの、いわゆる「都市雑業」を指す。調査結果によれば、「その他の収入あり」と答えた人の中で「友人あり」と答えた人割合が顕著に高い。ここではサンプル数が少ないが、そのこと自体が、そうした「都市雑業」による収入獲得の難しさ示しているともいえよう。そのように収入獲得の機会が「希少」であるほど、友人を通じた情報が重要になるのではないだろうか。

(2) —4　家族・肉親との関係

（図表13　家族との連絡の有無と釜ケ崎経験の有無）

	釜経験なし	釜経験あり
家族連絡なし	17	88
家族連絡あり	15	36



すでに見たように、今回の調査においては、調査の時点で野宿生活者の全体の七割（70.8%）にあたる167 人が、何らかの家族や肉親を持っていた。この167 人の中で調査時点においても家族との連絡を保持し続けている人は、野宿期間の長短によって統計的に有意な差はみられず、また、過去の野宿経験の有無によっても統計的に有意な差はみられなかった。

しかし、過去において釜ヶ崎地域での就労もしくは生活経験の有無による相違を見たところ、図表13に示されるように大まかな傾向ではあるが、釜ヶ崎を経由しない層の半数近く（47%）が家族や肉親との連絡を保持しているのに対して、釜ケ崎を経由した層では、それは約三割にとどまっている。

(3)　まとめ

野宿生活の「期間」という時間的推移は、当事者がそれまでの人的ネットワークを離れ、以前の社会関係を次第に希薄化させる過程であるのと同時に、当事者が野宿生活に基づく社会関係へと参入してゆく過程でもあるといえるのではないか。そのような傾向は、過去の野宿生活「経験」の有無とも密接にかかわり合っている。とりわけ、過去に野宿生活の経験を持たない層の場合に、時間の経過とともに、以前の社会的関係から離脱し、野宿生活での新たな社会関係を構築していく傾向がうかがえた。このことは、野宿生活者が、逆に、野宿生活から「離脱」しようとする場合に生起しうる諸問題を検討する上でも、重要な含意を持つのではないだろうか。

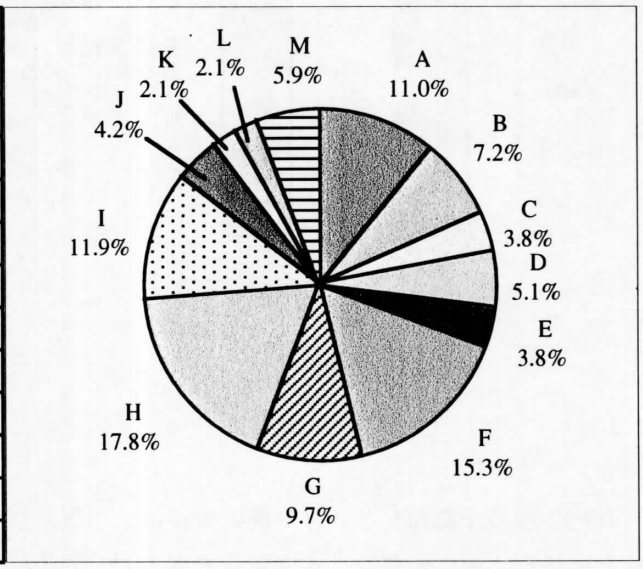
本節の冒頭で触れたように、野宿生活は屋内での生活とは異なるがゆえの困難が多くある。たとえば食事などでやむを得ず自分の生活場所を短時間でも離れる際、もろもろの日用品を管理することさえ問題になる。場合によっては、それらを誰かに「見ていてもらう」必要もあろう。今回の調査とほぼ同時期の1995年秋に数名の青年が無抵抗の野宿生活者(労働者)を道頓堀川に投げ込み殺害するという事件が生起した。このように野宿生活者に対する暴力が相変わらず頻発するなかで、野宿生活者自身が安全を確保するために、また、野宿生活によって直面するさまざまな不安に対処する上でも、友人などをつうじた社会関係を構築することが、野宿生活を生き抜くための重要な「資源」のひとつではあるまいか。今回は統計的データにはまとめられなかったものの、聞き取り調査を通じ、「ひとりでいたら危ないから、何人かで一緒にいることにしている」というようなコメントを頻繁に聞くことができたことを付言しておきたい。仮に、野宿生活が、いっさいの人間関係から離脱したところに成立するのだと考えられているとするならば、そのような考えは、今回の調査結果とは相いれない。野宿生活は個人が単独でおこなうにはあまりにも困難である。

5．野宿生活と場所の関係

（1）野宿生活と場所

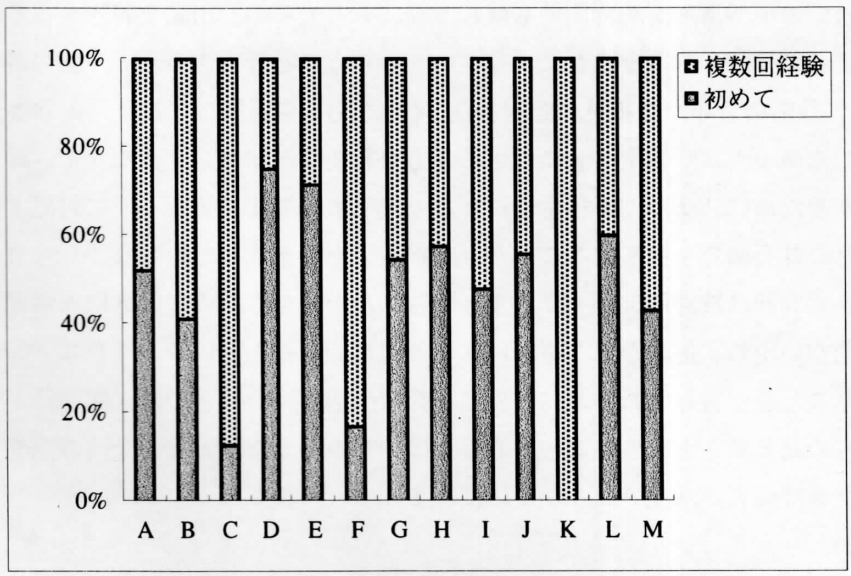
野宿生活を送るとは「野外」で就寝し生活の場を定めることを指す。そうであれば、その際の「野外」はどこでもよいということになるのだろうか。
これは今回実施した聞き取り調査におけるエリア別の単純集計である。

A	26	11.0%
B	17	7.2%
C	9	3.8%
D	12	5.1%
E	9	3.8%
F	36	15.3%
G	23	9.7%
H	42	17.8%
I	28	11.9%
J	10	4.2%
K	5	2.1%
L	5	2.1%
M	14	5.9%



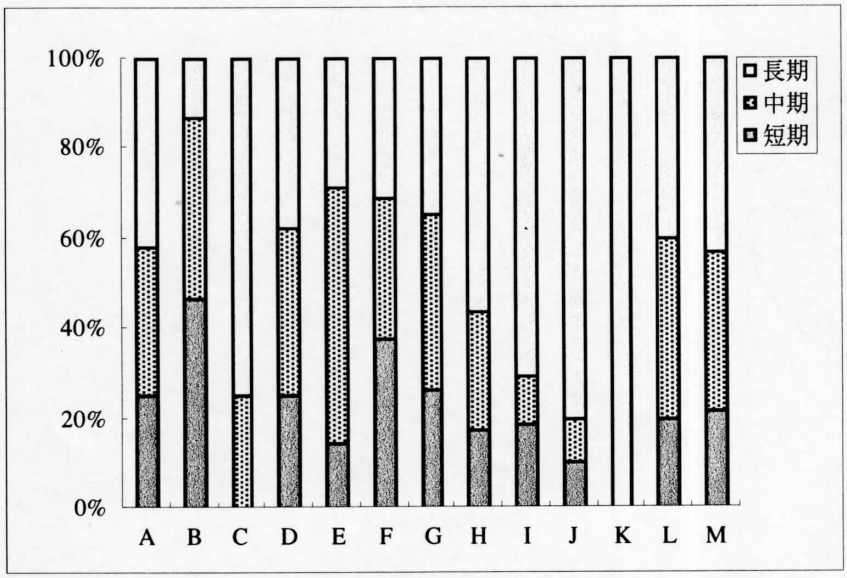
各エリアの内訳は、「A＝阪堺軌道恵美須町駅周辺」「B=天王寺公園入口付近」「C=四天王寺境内」「D=あべの筋」「E＝天王寺公園南部外周～地下鉄動物園前駅」「F=日本橋でんでんタウン」「G=ＪＲ新今宮駅北側から南海本線ガード下・阪神高速恵美須町ランプ付近」「H=南海電鉄なんば駅から歌舞伎座周辺」「I=心斎橋アーケードから船場センタービル周辺」「J=大阪城公園」「K=靱公園内」「L=あべのベルタ付近」「M=阿倍野近鉄百貨店前・近鉄あべの橋駅地下道」である。

（図１）



エリア別にみて割合が高いのは「H」地区で、次いで「F」地区、これは聞き取りがおこなわれた地点のプロットである。各地区の性格は「ターミナル周辺」「繁華街」「社寺・公園」とさまざまである。これら地区別の性格が、野宿生活とどのような関わりを持つのかを分析してみることにする。

（図２）



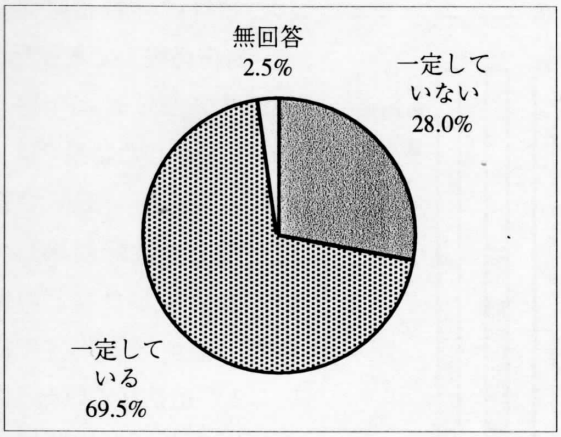
統計的に有意な差が見られた項目は「野宿期間」と「野宿経験」であった。各エリアと「野宿経験」をクロスさせた結果では、「K」「C」「F」で野宿生活を複数回経験していると回答したひとの割合が、他地区と比べて高いことが示されている（図１）。また「野宿期間」とのクロスでも示されるように「K」や「C」のエリアに野宿生活が長期にわたるひとの割合が高くなっている（図２）。これらのエリアは、夜などはほとんどひとの顔も判別できなくなるほどの暗さである。しかし野宿の「ベテラン層」には、かえってこれが人目につかなくて好都合であると考えられるのではないか。このことは、一連の「野宿者襲撃事件」によって、人目につくと身の危険を感じるという野宿生活者のおかれている立場を如実に反映しているといえよう。これを裏付けるような聞き取りは「F」地区でも確認でき、この地区は他の野宿生活者が多いため、万一襲われるようなことがあっても助けてくれるひとが多いので安心できるという意見を聞くことができた。また「K」地区などは廃品回収によって生計をたてているひとがおり、自前で所持しているリヤカーを置く際に、邪魔にならず都合がよいという意見もあった。これ以外にも「食事面」での分析でも見たように、野宿場所と生活との関連は深いものがある。こうした関連は「都市」というものが持つ情報・インフラなどの集中度の高さや求心性とあながち無縁ではなかろう。野宿生活といっても現代社会で生活していく上で手に入れねばならないものはさまざまにある。都市部ではそうしたものが有形無形を問わず入手しやすいのである。分析によって明らかになった側面は、こうした都市と野宿生活の共依存関係をある点で照射しているように思われる。

（２）野宿と定住性について

前述の各地区は聞き取り地点をあらわしたものであった。そこで、「いつもここにいらっしゃるのか」という質問で、聞き取り地点と定住度との関連を聞いてみた。回答の単純集計は次の円グラフであらわされる通りである（図３）。

七割弱が「一定している」と回答しており、聞き取り地点と「生活の場」が概ね一致していることがわかる。しかし、四六時中同じ場所にいるのではなく、収入形態によっては移動する生活を送っているひともいる。収入形態と定着度との関係をクロスさせて図示したのが図４と図５のグラフである。「廃品回収」によって生計をたてているひとは概して定住度が高く、廃品回収以外の収入を得ているひとは定住度が高くないことが示されている。聞き取りの中での話にもあったように、野宿しながら顔馴染みの「飯場」などに「直行」しているひとは、「どこで車に乗せてもらえるか」

（図３）

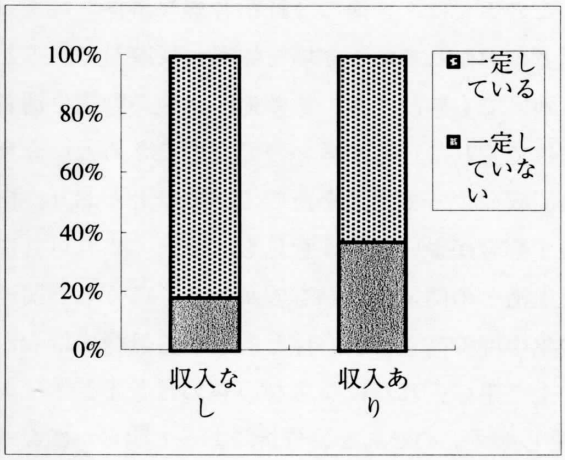


という約束をしておけば始終一定の場所で野宿する必要がなくなるのである。

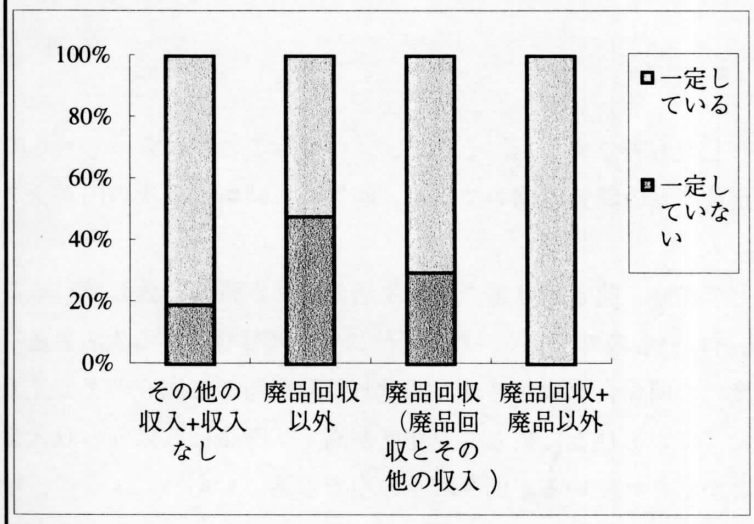
（３）収入と定住性

収入の有無と定住度との間には関連があるのだろうか。ここでは収入に関係する項目と定住度とをクロスさせた結果からそれを分析してみたい。

（図４）



（図５）



収入と定住度とをクロスさせた結果が（図４）である。結果に示される通り、収入があると回答したひとの方が定住度が弱いことがわかる（２３０ケース）。

先にも述べたように野宿生活者の中には野宿をしながら、日雇仕事に従事しているひともいて仕事先を確保できる限りで寝泊まりする場所を一定させる必要はあまりない。

反対に、廃品回収業を収入の糧とするひとには生活場所を一定しておく必要がある。とりわけ自前で廃品回収に用いる台車やリヤカーを所持しているひとは、仕事をするまでの間それらをどこかに留置しておかねばならない。そのためそうした物品が置けるだけの広さをもった場所を定める必要がでてくるのである。これを確かめるため収入形態とのクロスを図示したのが

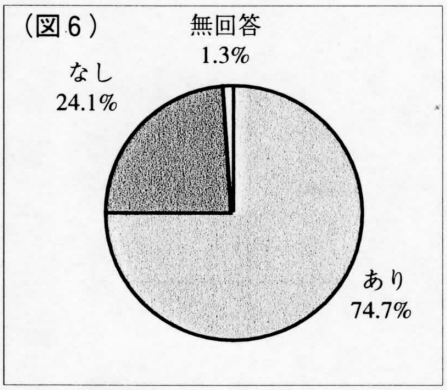
（図５）である（229ケース）。

ここで示されるように廃品回収業を営むひとは（専門であれ兼職であれ）、定住志向が高くなっている。一方、廃品回収業以外の収入を得ているひとは定住志向がそれほど強くないことが読み取れよう。

最後に収入がなく定住度の高いひとはどのようなひとびとなのかを見てみよう。ここで無収入かつ野宿生活の場所が一定していると回答したひと（79ケース）に対して、野宿経験と釜経験の回答分布を示した単純集計が（図６）と（図７）である。

集計結果からは、野宿自体は今回が初めてであるというひとの割合が圧倒的に多いことが読み取れる。また釜ヶ崎で仕事を探した経験があるひとの割合も高いものとなっている。これをエリア別の分布で見ると「Ｈ」地区で最も多く次いで同数で「Ｂ」と「Ｆ」が並んでいる（図８）（表１）。

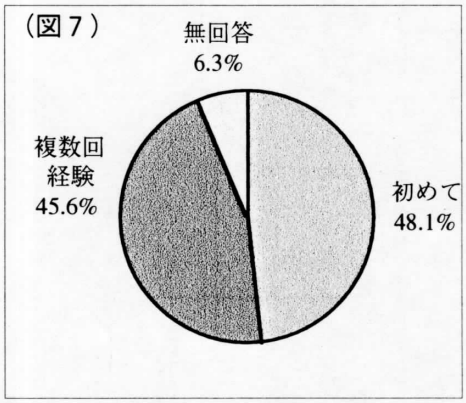
（図６）



あり	59	74.7%
なし	19	24.1%
無回答	1	1.3%

（釜経験の有無）

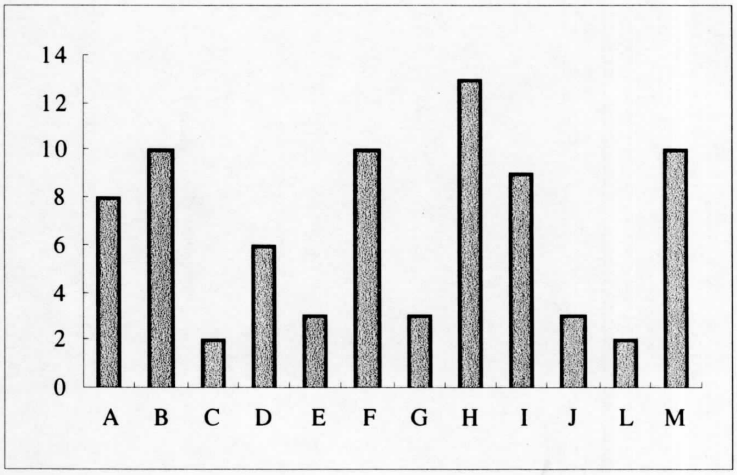
（図７）



初めて	38	48.1%
複数回経験	36	45.6%
無回答	5	6.3%

（野宿経験）

（図８）



（表１）

A	8	10.1%
B	10	12.7%
C	2	2.5%
D	6	7.6%
E	3	3.8%
F	10	12.7%
G	3	3.8%
H	13	16.5%
I	9	11.4%
J	3	3.8%
L	2	2.5%
M	10	12.7%

「H」地区や「B」地区は野宿生活者の数も多いため、初めて野宿を経験するひとには生活面での情報収集（「炊き出し」の場所や日時など）を得易いのではないか。「F」地区なども野宿しているひとの数が多く、比較的難波などの繁華街に近いため、生活に必要な情報や手段を得易いのではないかと思われる。

見てきたように、野宿生活者は決して「好き勝手」なところに場所を定めているのではないことが示されたと思う。収入との関連で見れば、廃品回収の用具を留置できる場所、野宿経験との関連で見れば、生活手段や情報が入手しやすい場所であるというように、個々人の野宿生活の実情から場所に対する独自の意味付けがおこなわれていることが、分析結果によって示されているのではないかと考えられるのである。